

挨拶できない若者

この朝は早起きをして、賃借している駐車場まで行き、工具箱をかき回しながら、ランチセットを探していた。すると後ろから、「おはようございます」と声がかかった。振り向くとそこには30代後半と思しき、一人の見知らぬ職人風の男が立っていた。小生もすぐ「おはようございます」と声を返し、「土台が出来たと思ったらドンドン上に伸び始めましたね」と返すと、「基礎さえ出来れば後は急テンポですよ」と、男の元気な声が返ってきた。その土地には数ヶ月前まで、年取った夫婦が住んでいたが、そろそろ潮時とマンションへ引越し、その土地は植木などは根こそぎ引き抜かれ、ツクバイも灯籠もそして大きな家もすっかり取り壊され、2分割されていた。そして今そのうちの1軒の建築が始ったのである。「物を作るって言うのは、無から有が生まれて、何か楽しみだね」と小生が言うと、その男は「自分もそれが楽しみで、大工になりました」と言って真っ黒な顔に白い歯を出して、照れくさそうに笑った。2015年6月12日の早朝のことである。

★ ★ ★ ★ ★

小生はもう今年で年男で72歳になる。奉職していた会社は、大手の1部上場企業で、従業員は5,000名を超えていた。工場等を持たないこの会社は、大卒採用が基本で、派遣社員以外に大卒以下の学歴者はいない。大きな受付には派遣社員が常時10人ほど受付業務を担当しており、朝、社員が出社すると、明るい声で「おはようございます！」と声をかける。ところがである、正社員でこれに比べて挨拶する者は誰もいない。はっきり言って、みっともないと言おうか、恥かしい現状がここにはある。古今東西1000年以上昔から、朝まず顔を合わせたときの挨拶は「おはようございます」だったはずだ。ところがこの一部上場企業では「おはようございます」と声をかけられても、正社員は誰も答えず無言で通り過ぎるのである。

★ ★ ★ ★ ★

小生はあるとき早朝、写真をとるために田舎道に入り込み、クルマを下りて歩いていると、小さな子供が「おはようございます」と声をかけてくれた、一瞬ビックリして振り向くと、まだ小学校の4年生ぐらいの女の子が二人、ランドセルをショって小生の後ろから早足で歩いてきた。「おはよう。寒いのに朝早いんだね」と、カメラのストラップを手繰りながら言葉を返すと、女の子たちは、笑顔で小生の前を通り過ぎて、やがて小走りに学校の方へ駆けて行った。

その昔、知らないおじさんには声をかけてはいけないし、知らない人から声をかけられても無視するようにと、教育された時期があった。今から10数年前、関西の学校へ暴漢が立ち入り、8名の生徒が殺害された頃のことだったろうか。憤りを抑えられないほどの、悲しい事件だった。

★ ★ ★ ★ ★

ある日茨城県結城市で拾って来た猫が、また失踪してしまった。広い野原が
いっばいに広がる結城市で育った猫は、家の中にじっとしているのがどうにも
苦痛だったと見えて、たびたび2階のテラスから飛び降りて、近所を徘徊して
いた。今回も昨夜から顔を見ていない。また2階のテラスから飛び降りたらしい。
テラスはネットで覆いをしたが、猫はどこかに少しのホコロビがあると目ざとく
ここから脱走する。無理もないところかもしれない。しかし以前、庭に出して飼っ
ていた猫が、家の前の道路で車にはねられてしまい、飼い始めてから3ヶ月で他界
してしまった。これに懲りて小生は、以来猫を家から出すことに踏ん切りがつか
なかつたのである。室内を一通り探してから、表に出て学園通りまで探しに行った。
ところがここで、小生はアレッと思う光景に遭遇してしまった。この学区では通学
途中の四つ角ごとに父兄が出て、通学の生徒たちを見守っている。父兄は**子供た
ちの集団が通るたびに「おはようございます！」と声を掛ける。**が、これに対して、
声を返す生徒は誰もいない。一体これは何なんだ。なんか日教組と教育委員会
の対立が、そのまま生徒と父兄の対立になっているような気さえするシーンだった。
1クラスを25人体制にして、教育はうまく行くはずではなかつたのか。にもか
かわらず何故「おはよう」と言えない日本人が、あちこちでこんなにも増殖して
いるのだろうか。それとも25人学級教育は無口な日本人を育てただけだつたのか。
日本の将来に向かって、小生は暗い影を見たような気がした。

★ ★ ★ ★ ★

つい1週間ほど前、小学校の同窓会があつた。この同窓会は殆ど毎年行われ
ており、他にも旅行会が年に1回ある。この昼食会には毎回10人ほどが集り4時間
ばかりのひと時を過ごす。都内や近県はもとより、名古屋や関西から来る者もいた。
たまたま我々の小学校5～6年生時代の担任が、大学を卒業して、すぐに赴任して
きた恩師で、我々よりちょうど12年人生の先輩だつたが、互いに教師と生徒とい
う意識はきわめて薄かつた。もう恩師は84歳になるが、足腰はおぼつかないもの
の、まだまだお元気で、毎回出席してくださる。当時我々のクラスは55人前後が
普通だつた。やっと午前の部、午後の部と分けられていた2部授業から解放され
て、朝8時過ぎから午後3時ごろまで6時間授業が行われるようになった昭和28～30
年頃のことである。戦争直後の極貧から、なんとか解放されて、金持ちの家庭で
はテレビが買われるようになっており、良くその家まで力道山を見に行った。
そんな時代だつたが、テレビのある家はクラスで2～3軒だけだつた。しかも
**クラスメートの中には父親を戦争で失った者も何人かはいた。彼らは新聞配達や、
納豆売りなどをして母親を助けていた。**しかし勿論悪に染まる人間がいなかつた
わけではない。納豆をクラスメートの家に売りに行って、余計に金銭をセビル者
がいたことも確かである。しかし我々のクラスには、幸いなことに悪に染まって人
様に迷惑をかける者は出なかつた。それはこの担任の若かつた先生の細かい配慮が

あったからでもあった。ちょっと危なげな家庭環境におかれている生徒を、先生はよく自分のアパートに連れて行って、親が仕事から帰ってくるまでの数時間、話し相手になったり、晩飯を食べさせたりしていたのである。また先生の宿直の折には、みんなで宿直室に遊びに行った。学校ではこうした行為は禁止されていたが、用務員のおばさんもこの先生の目的を察して、告げ口したり非難することはなく、むしろよくお茶を入れてくれた。この方も戦争でご主人をなくされていた。同窓会ではそんな貧しかった当時の話が飛び出すが、こんな少年時代を、それぞれが楽しかった思い出として心に刻んでいる。

★ ★ ★ ★ ★

そしてあるとき小学校の低学年時代のクラスメート（この男は当時、納豆とともに金銭を強要されていた。既にテレビがあった金持ちの息子だったのだが）から、こんな話を聞いた。それは何拾年ぶりかで同窓会を行った際、ここに出席したその昔の納豆少年が挨拶に立つと、古い話をポツポツと始めたのだという。「自分は少年時代、貧しい家に育って、お小遣いもなく自分で働いていましたが、納豆が売れないときなど〇〇君や〇〇君に、お金をセビッてしまい、他の方にも大変ご迷惑をおかけしてしまいました。心から謝りたいと思って、今日はこの会に参加しました。今、自分は新聞配達店を経営しており、若い人間を数人雇っています。この若者が昔の自分みたいにならないように、しっかりと経営してゆきたく思っております。」と釈明したのだというのだ。万雷の拍手を浴びて、セビられていた友人の心も、すっかり彼の昔の無礼を許す気になれたと言う。

★ ★ ★ ★ ★

あり難いことに今では家計を助けるために小学生が新聞配達するような状況は極めて減少してきた。しかしこれに変わって『無言の無礼』が限りなく増殖している。文科省よ！日本の教育はこれでいいのかと聞きたい。過日の同窓会の話題として、25人クラスになって本当に先生の目が、全生徒に届いていると断言できるのだろうか。ということが語られたが、大方の意見は否定的だった。いまから60年前の、1クラス55人は楽しかったし、個性豊かだった。塾へ行く人間は誰もいなかったし、放課後は学校で先生を捕まえてサッカーや野球をやって遊んでいた。生徒数が多かったから1クラスで2チームを編成することが可能で、サッカーも野球も2チーム作って、対抗試合を楽しんだ。

勿論当時のことだから体罰もあった。でもそれは生徒と先生とのルールにのっとった体罰で、必ずスリッパで尻を叩くものだった。注意された生徒は先生から、「〇〇、オマエ自分で悪かったと思うか?」と聞くと、生徒が「悪かった」と答えれば、先生は「じゃー何回だ?」と聞く。生徒が「3回」と答えれば、先生は生徒のお尻を突き出させて、スリッパで3回叩く。悪くないと答えたときには級友たちの意見を聞いて、みんなが悪くないと応えれば無罪放免だった。

★ ★ ★ ★ ★

25 人 1 クラスの時代、野球やサッカーの試合は行われているのだろうか。教師の目は確実に個々の生徒に届いているのだろうか。ならば何故イジメやクラス崩壊、さらには孤立感や学業成績、家庭環境問題等を苦にして自殺に走る生徒が後を絶たないのだろうか。筆者はふと思う。最近では女性教員や女性の校長等が非常に増えている。それが悪いというわけではない。しかし女性の場合、中学校ともなると、腕力という点で生徒にかなわない。このために先生の方がとかくオヨビゴシになってはいないだろうか。それに女性の場合はどうしても自分の家庭の問題も絡んでくる。日本の場合、まだ共働きに対する男性の協力体制が不十分であるケースも見受けられる。さらにはシングルマザーが教員と家庭を両方とも取り仕切らなければならないケースも多い。酷な話だ。逆に生徒の側にもシングルマザーが働きながら子供を育てるケースも増えている。とかく子供が悩みを抱えていても相談すべき相手が身近にいないのが現状である。そこで定年退職後のまだ元気な方をお願いして、こうした子供の相談役を勤める制度を設けてはどうかと思う。

★ ★ ★ ★ ★

さて小生は垂直頸椎である。このため姿勢が前かがみで、猫背である。小学校低学年時代、ある同級生から『猫背！』『猫背！』と言われてイジメられた。小生の育った家庭は幸いにも両親健在ではあったが、これを親に相談することはなかった。しかし小生はこんなときよく猫と遊んで過ごした。猫は小生に良くなついで、唯一、何でも話できる相談相手だった。動物は犬にしる猫にしる、嘘をついたり金銭を要求したり、裏切ったりすることはない。この猫が死んだときは、家中で悲しんでオイオイ泣いたけれども、もうイジメからは解放されていた。そして捕虫網を片手にチョウチョの採集に熱中するようになっていた。自然が優しく迎えてくれるような気がしていた。同じように昆虫採集するクラスメートもできた。このイジメっ子とは学業成績の面でも、大きな開きが生じていたから、おいそれとイジメられない関係が樹立されていたのである。しかし小生は 40 過ぎまで、寝汗をビッシヨリとかいてうなされたときなど、このイジメられた夢をいつも見ていた。イジメの傷跡はあまりにも深く心をえぐる。この悪夢から真に解放されるまで、実に 30 年の歳月を要していた。それゆえイジメは絶対に追放されなければならないと、小生は自分の経験から考えている。

★ ★ ★ ★ ★

今の都市圏の住宅環境では自然はすっかり乏しくなって、マンションが多く、猫や犬を飼える家庭は都市圏では必ずしも多くはない。子供たちにとっては八方塞になっているのではないだろうか。子供たちを覆っている心の壁を、打破することが、今の教師には求められているのではあるまいか。文科省にとってまず大事なことは、特に小中学校においては偏差値意識を取り払って、人間形成にもっと

集中すべきであるということと、命あつての教育であり、命あつての受験であることを教師も父兄も実感することであろう。そして学校に対して、受験勉強を強要する父兄があつたなら、私立の小中学校への転校を勧めるべきであろう。

★ ★ ★ ★ ★

そもそも教育って何なんだ。大学へ進学するための技術指導しかやっていないのではないだろうか。教育とはそんなたやすいことではないはずだ。人格の形成や個性の尊重や、自然を観察する力や、自他を認める生き方を身に着けるためのものではないのか。塾へ行く時間が多すぎて、肝心の人格形成に割かれる時間はドンドン減っている。この事実を知りながら、学校も父兄も塾も三者が一体になってこの偏重教育を実施している。その上一旦大学に合格してしまえば、特に文科系では勉強から遠のいたマージャンやアルバイトの世界が待っている。中学や高校では人格形成や、個性を伸ばし、思考する能力を養う教育に専念し、大学に入ってからもっと勉強する環境を作るべきではないのか。教育改革は口では騒がれているが、今のところは受験制度の改革が主題で、人格形成や、人間としての教育にいたっていない。そして物事を科学的に探求する人間が乏しくなっているように思う。

★ ★ ★ ★ ★

我々の時代、テレビゲームもなかったし、まともな玩具すらなかった。玩具として唯一市民権を獲得していたものはベーゴマ、ビー玉、そしてメンコ、ケン玉、タコアゲぐらいで、空き缶や空き箱を見つけてきては、遊び方を自分たちで工夫した。そこから想像力が働くようになった。やがて野球やサッカーをやるようになったが、靴を履いていない裸足の者も多かった。すべての物が大切にされた時代だったから、空き瓶も空き缶も転がっていることはあまりなかった。廃品回収業者がすべて何がしかの金額で買い取って行ったからである。これに引き換え現在は何でも手に入るし、邪魔なものはすべて捨ててしまう。それは花の命も、動物の命も、そして人間の命ですら同様である。戦後 70 年、我々が得たものは確かに無限に多いし、この中には我々の幸せに役立っているものも数多い。だがその一方で、我々が失ったものはもっと多いように思えてならない。「おはようございます」と言えない荒廃した若者の心、邪魔なものは命のあるものでも捨ててしまうという精神、殺してしまえばすべてが片付くと考える安易な発想方法。道徳の授業が復活するという話もある。筆者は遅きに失した感ありとは思ふが、早く始めるべきであると考える。そして何よりもこの地球上には、命を授かって生きているものがほとんど全てであること、どんな命も一生懸命に生きようとしていることを、まず教えることから初めて欲しいと思う。自信に満ちた大工さんの「おはようございます」と、受験戦争でへし折れた無言の生徒、現実には 2 つの対極がある。受験戦争に勝ち抜く技術を身につけた若者よりも、「おはようございます」と元気に言える若者を育てて欲しいと思う。そしてイジめることもイジメられることもない学校であつて欲しい。

※この文章を記したのは2015年8月のことであった。ところが2016年10月12日に予期せぬ出来事に遭遇した。群馬県妙義町から富岡市に抜ける県道を走っていた時のことである。横断歩道の手前で前を行く車が停車したので、小生も車を止めた。そこには高田小学校があって、横断歩道には押しボタン式の信号がある。この信号が赤になってランドセルをしょった高学年と思われる少年が信号を渡ったのである。少年が渡りきって車が走り始めると、少年は振り返って学生帽を取って、通り過ぎてゆく車に一礼を返した。

それから1カ月ほど経ったある日、今度は逆の方向へ車で通った。午前8時ぐらいの時間帯で、登校する生徒が3人ほどおり、同じように信号のボタンを押してクルマを止めた。小生も止まった車の1台であったが、以前と同じように渡り終わった生徒たちは、それぞれ帽子を取って通り過ぎてゆく車に挨拶を返した。

山間の小学校にはこんな礼儀作法がまだ生きていた。なぜ都会の中学生にはこんな礼儀がなくなってしまったのだろう。そのことが小生にはむしろ不思議な気がしてならなかった。おそらくこの山間の町には受験戦争以前に、人間がどう生きるべきか、そして家庭内でも、家族のコミュニケーションが活着ているのだろうと、小生には思えてならなかった。

2017年1月10日、群馬県高崎市の西、甘楽富岡との境界近くにある吉井町に行った。ここの農家と交流が出来て、しばしばこの地を訪ねるようになっていたからである。この日は国道254号線のバイパス沿いのビニールハウスの脇に、群馬名物のカラッカゼ除けを作っていたのである。午後3時ごろ、寒くなってきたので、そろそろ店じまいしようかと思っていると、学校帰りの中学生が5~6人通りかかった。そしてそれぞれ小生に「こんにちわ!」と挨拶を交わしてゆくのである。予想もしていなかったことだったので少々驚いたが、小生もあわてて挨拶を返した。ここも同じ群馬県で、徒歩5分ぐらいのところに吉井西中学校がある。

どうして群馬県の子供たちはこんなに礼儀正しいのに、都会の子供たちは挨拶されてもそれに応えることが出来ないのだろうか。小生はしばし戸惑いの渦の中に巻き込まれていた。都会では人と人の心の繋がりは分断され、この地には心の絆がいまだ活着ている。この理由は何なのだろうか。学校教育のためか、それとも環境のためか、はたまた家庭での子供の育て方によるものなのだろうか。文科省のエライサンよ、この理由を分かりやすく教えてほしい。